

〔資料2〕 山口県の農業の発展に力をつくした人びと

山口県の農産物の代表的なものとしては、米とうんしゅうみかんをあげることができます。その他、自然をいかしたくだもの・野菜・花・肉用牛などの生産物があります。

このように豊かな生産が行われるようになったのは、多くの人たちの大変な努力や研究があったことを忘れてはなりません。ここでは、その代表的な4人の先人たちのはらってきた努力の足あとを、たどってみることにします。

① 伊藤音市 (1855～1912年) — 防長米の品種改良につくした人 —



(山口市役所所蔵)

今からおよそ100年前ごろ、山口県の米(防長米)は、日本で一番おいしいと評判がよく、高い値段で売られていました。

このように山口県の米の人気がよかったのは、ほかの県よりも早くから米の品種改良に取り組み、大変品質が優れていたからでした。

小鯖村(今の山口市小鯖)の伊藤音市は、何とかしておいしくてたくさんとれる米をつくらうとしました。根がじょうぶでたおれな

い、病気や害虫に強い、つぶが大きい米をさがし歩いては、自分の田で実際に育ててみるということを何年もくりかえしました。明治22年(1889年)ついに「都」という品種から「穀良都」とよばれる、大つぶで形が整い、ねばりのあるおいしい米を作ることに成功しました。

音市は、さらに研究を続け「光明錦」という収穫量の多い品種を作り、やがてこれが山口県を代表する米となりました。

② ^{やまもと まんの じょう}山本万之丞 (1860～1937年) —山口みかんさいばいの父—

山口県のみかんどころとして名^な高^{だか}い屋代島 (大島) は、山が海岸近くまでせまり平地が少ないところです。昔から人びとはわずかばかりの平地にさつまいもや麦を作り、米の不足を^{おぎな}補いながら^{まず}貧しい暮らしをしていました。農家の暮らしを少しでも豊かにしようという願いのもとに屋代島のみかんづくりは始まりました。

今から160年前ごろ、日良居村^{ひらい}の庄屋^{しょうや}をしていた藤井彦右衛門^{ふじい ひこう えもん}は、紀州^{きしゅう} (今の和歌山^{わかやま}県) に出かけた時に安くておいしいみかんを知りました。さっそく大阪泉南^{おおさか せんなん}地方から、みかんの苗木を数百本買い、農家に^{さいばい}栽培をすすめました。しかし、「田畑^{たはた}に木を植えるなんて」と人びとから相手にされず、彦右衛門の思いははたせませんでした。

山本万之丞は、彦右衛門の願いを受けつぎ、みかんづくりに取り組みました。ある日、畑のみかんの木から、えだがわりを見つけ、別のみかんの木につぎ木をしたところ、今までとはちがうあまくて皮のうすいみかんができることを発見しました。万之丞は、そのみかんの^{わか}若いえだをとっては、つぎ木をくりかえし村の人びとに分けあたえました。また、



山本万之丞^{おう ひ}翁の碑 (周防大島町^{す おう おおしま ちやう})

つぎ木の仕方^{ひりょう}や肥料のやり方を熱心に教えてまわりました。「万之丞みかん」とよばれるこのみかんは、毎年よく実を付け、しかもかなりの^ほ保存^{ぞん}ができ、市場の値段がよいときに出荷できました。こうして、屋代島は豊かなみかんの島になっていきました。

③ お ばた たか まさ 小幡高政 (1817～1906年) — はぎ 萩のなつみかんづくりの そう し しゃ 創始者 —



萩のなつみかん

昔からさかえた萩は、こがね色のなつみかんがよくにあう町です。みやげ物売る店先は、なつみかんのほかにさとうづけ、マーマレード、おかしなどのなつみかんを使った品物がたくさん並び萩の大切な農産物となっています。

小幡高政は、ちやうしゅうはん 長州藩 (今の山口県) の武士でしたが、めいじじだい 明治時代には小倉県 (今のふくおか福岡県) のけんれい 県令 (知事) をつとめた人でした。高政が、県令をやめて萩に帰ってみると、町はせいじ 政治の中心が山口にうつ 移ったこともあって、人は減り、仕事をなくしたもと武士たちの生活は、とても苦しいものでした。高政は、こうした人びとに仕事をあたえ、生活をゆた 豊かにしようと考え、町の人びとにはたらきかけてなつみかんづくりを始めました。苗木を1万本買い、つぎ木をしては増やし、家々の庭やあき地に植え付けていきました。多くの人びとは、高政の行動をうたが 疑って、相手にしませんでした。高政の熱心さに心を動かし始め、しだいに協力する人も増



きやう と ほく ぶつ かん しょ ぞう
(萩市郷土博物館所蔵)

えてきました。植え付けられたなつみかんは4万本あまりとなり、やがて実もなり始め、船でおおさか 大阪の市場にも出荷されるようになって、生産もどんだんのびていきました。高政のなつみかんづくりは人びとの生活を豊かにし、萩を代表する農産物として全国にも知られるようになりました。

④ ^{むらもとさんごろう}村本三五郎 (1736～1820年) —^{いわくに}岩国れんこんさいばいの父—



^{ジェイアールさんようほんせん}J R山陽本線の^{ふじゅうえき}藤生駅を過ぎると列車の
^{まど}窓から、緑色の大きな葉が重なり合うはず
 田が見えてきます。大変広いはず田の面積
 はおよそ230^{ヘクタール}ha、生産量およそ4,700^{トン}tで山
 口県の生産量の $\frac{7}{10}$ をしめる県内最大の生産
 地です。ここは昔、海でしたが、^{いわくにほん}岩国藩
 (^{きつかわこう}吉川公) が100年にわたって海を干たくし

て造った新しい土地で、塩分が多く、水はけも悪いので米は作れませんでした。

村本三五郎は、農民の^{あさうえもん}浅右衛門の^{ちやうなん}長男として生まれました。三五郎は、
 農民を苦しめるこの土地に合った作物を実らせ、くらしを豊かにしたい
 気持ちで、麦やさつまいもを植えてみましたが、どうもうまく育ちませ
 んでした。そのころは、藩で作られている^{とくさんぶつ}特産物を持ち出したり、作り
 方を教えたりすることを、^{きび}厳しく取りしまっていました。三五郎は、^{ふう}風
^{らいほう}来坊をよそおい^{おかやま}岡山、大阪地方を歩き回り、わたの作り方や干たく地の

塩ぬきの^{ぎじゆつ}技術をひそかに学んで帰りました。
 また、はずの^{たね}種も持ち帰り、農民に育
 て方を教えました。その後も、三五郎はた
 め池を造ったり、新しい農機具を発明した
 りしました。おいしいことで知られる岩国
 れんこんは、三五郎の努力が実を結んだも
 のなのです。



村本三五郎翁の碑 (岩国市)